

実践報告 (Report)

椋山女学園大学教育学部FD活動 公開シンポジウム

総合学園ならではの教育活動の展開

～併設校・附属学校園と教育学部の連携の実態とこれからの展望～

**Report on Sugiyama University's Department of
Education faculty development symposium
Investigation into the educational activities unique
to a multi-educational institution: the present
and future of cooperation between Sugiyama's
Department of Education and its kindergarten,
and elementary and secondary schools**

磯部 錦司

Kinji Isobe*

山田 真紀

Maki Yamada*

1. はじめに

平成23年度教育学部FD委員会では、教員の授業力の向上を目標に掲げ、以下の3つの活動を展開してきた。第一に、授業公開週間の設定であり、平成23年6月に実施した。これは教員がお互いの授業を参観し、フィードバックを与えるものであり、教員の相互理解と授業力向上に資する取り組みとなった。第二に、附属幼稚園・小学校、併設の中学校・高等学校の先生方を招き、総合学園ならではの教育活動の展開について探るシンポジウムの開催である。このシンポジウムについては以下に詳述する。第三に、外部講師を招き、最新の保育と教職の情報を得るための講演会の開催である。この講演会は、1月末の卒業研究発表会とともに実施し、保育職や教職に就く卒業生や、保育職や教職に就く予定の在学生にも参加を呼びかけ、大学教員、卒業生、在校生が共に学び合うことのできる取り組みとなった。

特に、本稿で報告するシンポジウムが主題とする「総合学園ならではの教育活動」への展望は、教育学部と併設校・附属学校園の関係だけでなく、学園全体の将来構想にも関わる重要な視点を探るものであり、その教育活動の展開の深まりは、園児、児童、生徒、学生の育ちへと生かされていくことが期待される。そこには多々の課題が見られるが、その教育活動の可能性は多大であり、今日の教育界へ示唆する内容をも包含しているように思われる。その展望に向けた具体的な実践への第一歩となることを願い、本シンポジウムの実施に至った。

2. 公開シンポジウムの概要

(1) 実施日時、場所

日時 平成23年12月22日(木) 15時～17時

場所 教育学部棟314教室

(2) 目的

これまで併設校・附属学校園と教育学部が草の根的に展開してきた連携活動について相互理解し、さらなる今後の連携の展開と方向について考えを出し合い、総合学園の特色を生かした教育活動についての展望を共有する。

(3) 主催

相山女学園大学教育学部

(4) 企画

企画者 相山女学園大学教育学部FD委員会

パネラー 山茂正憲（相山女学園高等学校教諭、同学習指導部長）

川野幸彦（相山女学園大学附属小学校教諭、同研究主任）

三田郁穂（相山女学園大学附属幼稚園教諭、同教頭）

山田真紀（相山女学園大学教育学部准教授）

進行 磯部錦司（相山女学園大学教育学部教授）

(5) 参加者

約60名

相山女学園大学教育学部教員、併設中学校・高等学校教員、附属小学校教員
附属幼稚園教員

相山女学園大学学長、併設中学校・高等学校校長、附属小学校校長、附属幼稚園園長

相山女学園大学歴史資料館館長、学園本部職員、学園関係者 他

(6) 内容

15:00 学部長挨拶

15:05～15:15 趣旨説明

15:15～15:35 中学校・高等学校の実践の紹介と今後の展望

15:35～15:55 小学校の実践の紹介と今後の展望

15:55～16:15 幼稚園の実践の紹介と今後の展望

16:15～16:25 大学の立場から（論点の整理）

16:25～16:50 フロアディスカッション

16:50～17:00 まとめ



シンポジウムの様子

3. シンポジウム：司会およびパネラーの発言の概要

(1) 学部長挨拶（学部長：大森隆子）

教育学部立ち上げから現在に至るまで、併設校・附属学校園には多大なるご協力をいただき、その連携と協力のおかげにより、第一期生・第二期生とともに、多くの保育者と教員を輩出することができたことに感謝申し上げる。また学期末のご多忙中にも関わらず、本シンポジウムに足を運んでいただいた参加者すべてに感謝の意をお伝えしたい。

(2) 本シンポジウム趣旨説明（司会：磯部錦司）

本シンポジウムの目的は、これまで併設校・附属学校園と教育学部が草の根的に展開してきた連携活動について相互理解し、さらなる今後の連携の展開と方向について考えを出し合い、総合学園の特色を生かした教育活動についての展望を共有することにある。この目標を達成するために、以下の2点に焦点をあてて議論していきたい。

- ① 各教員レベル、またはそれぞれの併設校・附属学校園で独自に展開されてきた草の根的連携活動について出し合い、相互理解すること。さらに各教員、またはそれぞれの併設校・附属学校園の「連携に対する思い」を出し合うこと。
- ② 参加者とともに「総合学園ならではの教育活動」のイメージを構築していくこと。その実践が学園の教育実践の向上を促し、結果として、園児、児童、生徒、学生に還元されていくような方向性を持つように構想すること。

(3) 中学校・高等学校の実践の紹介と今後の展望（椋山女学園高等学校：山茂正憲）

現在までの椋山女学園中学校・高等学校と教育学部の連携は、①ふれあい実習Ⅰ（観察）の実習生受け入れ、②中学校教育実習体験のボランティア学生受け入れ、③教育実習の実習生受け入れの3つに整理できる。

第一のふれあい実習Ⅰ（観察）の実習生受け入れについては、平成19年度より毎年、5月から7月にかけて、4回から6回程度、教育学部1年生約200名を受け入れ、授業観察の場を提供している。最寄りの覚王山駅の混雑を助長するなどの問題もないわけではないが、校区の広い私立学校の児童・生徒が電車で通学することの現状を実習生にも知ってもらう機会でもある。この実習は、ありのままの中学校・高等学校の学校生活と授業風景を参観してもらうことに意義があるにとらえている。

第二の中学校教育実習体験は、平成23年度より数学コースの学生を対象に始まったものである。数学の授業の参観からはじめ、少しずつ机間指導にも加わってもらっている。生徒も、先生には質問しづらくとも、大学生には気軽に質問できることもある。この活動は中学校教員にも生徒にも好評であり、今後も続けていきたい。

第三の教育実習は、毎年、他学部の学生も含めて30名から50名の学生を受け入れている。通常の業務に加えて実習生の指導を行うため、受け入れ教員にとって負担は

大きく、実習時期が中間考査の直前に位置づくことから、なかには実習後に教員が「授業のやり直し」をせざるをえない場合もあるが、教諭とは本来、後進の育成をも業務に含むものでもあり、本校の教員はみな熱心に指導を行っている。

最後に、連携を目的として大学と併設校・附属学校園の関係者が集まる場はこれまでにほとんどなく、場が設けられたことの意義は大きいと考えている。中学校教育実習体験のように相互にメリットのある活動が今後も展開されることを期待している。

(4) 小学校の実践の紹介と今後の展望（相山女学園大学附属小学校：川野幸彦）

附属小学校では、現在、「ひろがり、つながり」をテーマとし、共同的な学びを実現する教育実践を行っている。附属小学校と教育学部との連携は、①ふれあい実習Ⅰ（観察）の実習生受け入れ、②ふれあい実習Ⅱ（参加）の実習生受け入れと指導、③教育実習の実習生受け入れと指導、④算数の授業やクラブ活動におけるボランティア学生の受け入れ、⑤大学のケースメソッド等において学生が授業で学んだことを小学校で実践する場の提供、⑥大学の教員の専門性を生かした出張授業の6つに整理できる。

第一のふれあい実習Ⅰ（観察）の実習生受け入れについては、中学校・高等学校と同様に、平成19年度より毎年、5月から7月にかけ、4回から6回程度、教育学部1年生約200名を受け入れ、授業観察の場を提供している。

第二のふれあい実習Ⅱ（参加）の実習生受け入れについては、平成19年度より年間15回程度、15名から30名の学生を受け入れ、クリプトメリアンサタデースクール（旧：土曜教室）の学習タイムに模擬授業を行う場を提供している。出勤している教員は学生の模擬授業を参観し、授業後に行われる討論会にて学生指導を行っている。

第三の教育実習については、今年度は、6月と10月に4週間に渡り合計22名の学生を受け入れ、各クラスに2～3名を配置し、指導を行った。

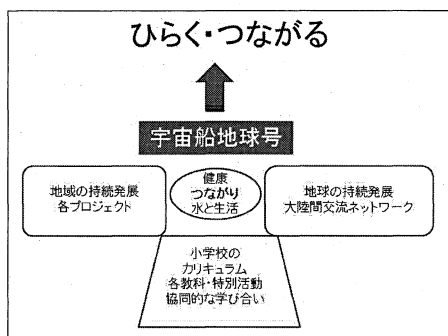
第四のクラブ活動へのボランティア学生の受け入れは平成19年度よりバトントワリング部や吹奏楽部において実績がある。また算数サポーターについては平成23年度から始まった取り組みであり、数学コースの学生に少人数クラスによる算数の授業において机間指導に加わってもらっている。

第五の学生の学びの実践の場については、小杉裕子准教授や渡邊康教授のケースメソッドの学生が児童に向けてミュージカルを上演し、あるいは石橋尚子教授のケースメソッドの学生が「命の授業」として、総合学習の時間に昔の道具を用いて児童とともに稲の脱穀や精米を行い、そこでできた米を炊いておにぎりにして一緒に食べるという実践を行った。いずれも児童には好評であった。

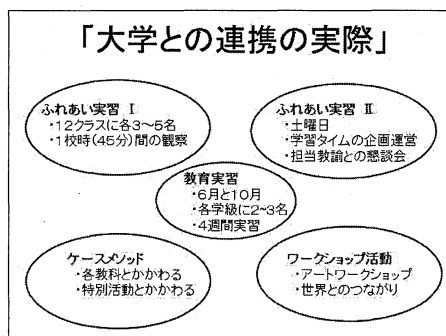
第六の出張授業では、野崎健太郎准教授によるビオトープ作りの指導、磯部錦司教授のアートワークショップ等が行われた。野崎准教授によるビオトープ作りの指導の後、小学校ではそれがめだかの研究に発展し、今年度、メダカ研究の権威である愛知教育大学名誉教授の岩松鷹司氏にちなんだ「岩松鷹司賞」という荣誉ある賞を受賞することができた。また磯部教授のアートワークショップは、ひとつの芸術作品をシド

ニーとプラハの子ども達とともに作り上げるものであり、ワークショップ後に児童の書いた作文から、「世界の友達とつながる」「命の大切さを共有する」ことの実感が得られた様子が見て取れた。

今後の連携の展望として、これらの諸活動は子ども達により教育効果をもたらしていることから、継続的な取り組みに育てていきたい。そのためには年間のカリキュラムのなかに連携活動を位置づけ、計画的に行っていくことが必要であると考えている。



資料1. 椋山小学校の教育の構造*



資料2. 椋山小学校と教育学部の連携の構造*

* 資料1、2は当日の発表資料より引用

(5) 幼稚園の実践の紹介と今後の展望（椋山女学園大学附属幼稚園：三田郁穂）

まず、小学校以上の学校教育が教科主義をとるのとは異なり、幼稚園は園生活そのもの、子どもの遊びそのものが教育活動であることを理解することが大切である。保育者は保育上のねらいを定め、ねらいを達成できるように園生活や遊びの環境を整え、子ども達の主体性を尊重しながら働きかけを行っていく。この一連のプロセスには高い専門性が必要であり、「子ども達と遊ぶくらいなら入学したての1年生でもできる」という理解であると連携は難しくなってしまうことを最初に確認しておきたい。

附属幼稚園と教育学部の連携は、①ふれあい実習Ⅰ（観察）の実習生受け入れ、②プレ実習の実習生の受け入れ、③教育実習の実習生受け入れ、④保育系授業における保育参観の場の提供、⑤学生のボランティア受け入れ、⑥学生の学習の公開の場の提供、⑦大学の教員の専門的知識の提供の7つに整理できる。

第一のふれあい実習Ⅰ（観察）の実習生受け入れについては、小学校・中学校・高等学校と同様に、平成19年度より毎年、5月から7月にかけて、8回程度、教育学部1年生約200名を受け入れている。平成19年度から22年度までは、子ども達と触れ合うタイプの実習であったが、1年生は観察の基礎を身につけるべき学習段階にあること、また意図があって構成されている保育場面がかき乱され、立て直しが必要になる場面が多いことから、平成23年度からは観察実習という形態で行っている。

第二のプレ実習の実習生の受け入れに関しては、2年生から法令に定められた保育実習が始まるのに先立ち、附属幼稚園で実習の基礎を学ぶという位置づけで始まり、

毎年9月と2月に保育・初等教育専修1年生の80名から100名を受け入れ、観察実習および参加実習を行っていた。しかしカリキュラム上の位置づけを持たない実習であること、一度にひとりの教員が対応できる上限以上の多数の実習生が来ること、なかには観察実習や参加実習に必要な基礎的技能を身につけていない学生も見受けられることから課題が多かった。

第三の教育実習の実習生受け入れについては、年間5～8名の実習生を受け入れている。おおむね実習生は熱心に取り組んでいるが、責任実習において準備された保育内容が子どもの実態と合っていない、制作活動に偏っているなどの課題も見られた。

第四の保育系授業における保育参観の場の提供については、平成23年度より朴信永講師の「幼児理解の理論と方法」の授業において、80余名の学生に4回の保育参観の場を提供している。限られた園のスペースに対し、学生の人数が多いため、圧迫感があるものの、観察を重ねるごとに学生の保育に対する理解が深まったとの報告を受け、効果があったととらえている。

第五の学生ボランティアの受け入れについては、通常保育中はもちろん、延長保育のくまちゃんクラスにも継続的に学生を受け入れている。土曜日や長期休暇中に地域住民に向けて公開しているすぎのこ絵本図書館の運営や、そこでの読み聞かせの活動において、さらに学生のボランティアを受け入れることができていると考えている。

第六の学生の学習の公開の場の提供としては、毎年、小杉裕子准教授のケースメソッドの学生がクリスマス劇やトーンチャイムの公演を行っており、園児に好評を博している。

第七の大学の教員の専門的知識の提供については、磯部錦司教授や石橋尚子教授に、園内研修会の講師や、保護者対象の子育て講演会の講師をお願いしている。

今後の連携の展望としては、現在、大学と幼稚園で各種実習における課題について話し合いを重ねているところであり、近い将来により良い実習のあり方が見出されようと考えている。さらに学生ボランティアを主体とした互恵的な活動にも期待を寄せており、例えば、延長保育における学生ボランティアの増員、すぎのこ絵本図書館での読み聞かせ実習の組織化などを構想しているところである。

(6) 大学の立場から：論点の整理（椋山女学園大学教育学部：山田真紀）

現在のところ併設校・附属校園と教育学部との連携のスタイルは、①併設校・附属校園が教育学部の実習生を受け入れる、②併設校・附属校園がケースメソッドなど教育学部の授業の実践の場となる、③教育学部の教員の専門的知識を併設校・附属校園へ提供する、の3つに類型化することができる。現状としては、①>②>③であり、教育学部が圧倒的に併設校・附属校園にお世話になっている状態である。

今後は互恵関係を築いていく必要があると考える。教育学部の教員が心がけるべきは、①連携活動が、学生の学習上のメリットだけでなく、併設校・附属校園の先生方にも資する場になるように、つまり、大学の教員と併設校・附属校園の教員の学び

あいの場になるように構想すべきである。②その結果、教員の教育力の向上を媒介として、もしくは併設校・附属校園の子ども達のために有意義な学習の場をともに構想することにより、子ども達に有意義な教育の場を提供できるように心がけることが肝心である。

その萌芽的なあり方が、附属小学校の「ふれあい実習Ⅱ」討論会のなかにみられる。討論会では、学生が模擬授業をするうえで直面する課題、例えば「3分間で問題を解かせる場合、作業の早い子は30秒で完了させるのに対し、作業の遅い子は終了時刻に1問も解けていないことがある。授業者はこの差にどう対応すべきか」などについて、学生・小学校教諭・大学教員がフラットな関係で議論している。この時間は優れた教員養成の場として機能しているだけでなく、小学校の教員と大学の教員の学びあいの場にもなっている。教員養成と現職教育のハイブリッド型の椋山の連携を模索することが私自身の目標でもある。

4. フロアディスカッションの概要とまとめ

(1) 連携のあり方について

「連携」と「協力依頼」を混同してはいけない。教育学部教員は現状では協力依頼がほとんどであることを自覚せねばならない。一方で、保育者・教員養成を行う教育学部の性格上、教育実習生の受け入れなど、協力依頼が不可欠な場面も多い。それに対して、併設校・附属校園が対価を求めると、「我々が教育学部の学生に費やした時間と労力に見合う分だけ、大学の教員も併設校・附属校園で働いてください」というような複雑なことになってしまう。我々が目指すべきは、共同的な連携のあり方の模索である。他の公立の幼稚園や学校ではできないこと、上に大学があるからこそ可能になる教育活動の展開があるはずである。それを模索し、実現していくことに、総合学園であることの意味が見出されるであろう。

(2) 幼稚園における保育の特殊性の理解について

教育学部は保育に関する実習の「観察」の重要性をもっと重視すべきである。例えば、砂場でA君がB君のスcoopを取りあげ、トラブルになっているとする。保育者はA君とB君の日頃の特性を踏まえ、A君やB君の成長のねらいを定めたうえで、適切な働きかけを行う。場合によっては、働きかけないという働きかけを行うかもしれない。その保育者の行為の真意は、継続的な観察によってのみ理解しうるであろう。朴講師の「幼児理解の理論と方法」の保育参観では、学生は、1回目は何をどう見ていいかとまどうばかりであったが、観察を重ねるごとに、ある特定の文脈のもとで保育者の行為の意図を理解することが少しずつ可能になり、それにともない保育者の専門性の高さに尊敬の念を感じるようになった。そして学生は「保育者は子どもが好きなだけでは務まらない」という根本的な事実気づくに至ったという。参加実習に至るまで

は、観察の技術、保育の基本的な知識と技能を身に着けていることが大切であることを再度確認したい。

(3) 研究における連携について

併設校・附属校園での教育実践の蓄積がどのようになされているのかについて。日々の実践に時間を費やし、十分な研究の時間が取れないのが共通の現状である。附属幼稚園では年間の研究テーマを決め、年度末には研究成果をまとめているが、現在のところ、子ども達のプライバシー保護の観点から、研究の成果を公開することは行っていない。中学校・高等学校でも、外部研修会で得た知識や情報を職員会などで共有したり、実践記録を残したりということは継続的に行っている。

今後は、大学の教員と併設校・附属校園の教員が、教育面だけでなく研究面においても連携していくことが望ましい。大学の教員は最近のトレンドや理論には詳しいが、現場が抱える課題には疎い、もしくは現場の教員は実践上の課題を抱えているものの、それを解決するのに必要な知識や技術にアクセスする場が持ちにくいなどの現状があり、共同するならば相互補完的な関係になりうる。大学には学習指導要領の執筆に携わった教員もいるため、学習指導要領の改訂が意図しているところを現場に届ける媒介者の役割を果たすことができ、また大学の教員側としても「理想はそうであっても現場はこのような現状によりそれを実現するのが難しいのだ」という実態を教えてもらう貴重な場になる。実践家は自分の実践を丁寧に記録していくことが大切なのであり、大学の教員とともに、「新しい」「理想的な」理論構築のためにともに研究していく関係こそが求められる。

来年度より、教育学部紀要は、教育学部教員と併設校・附属校園の教員との共同執筆論文を積極的に受け入れる方針となったため、今後の研究面での連携の成果が教育学部紀要に結実されることを願っている。

(4) 司会者のまとめ

これまでのパネラーの報告、およびフロアディスカッションを踏まえ、下記の4つの内容を確認した。

- ① シンポジウムは具体的な連携の方向について意見を集約するものではなく、オープンエンドな形で終了するものの、今後の連携のあり方について構想する第一歩としたい。
- ② 連携においては互惠的な方向性を探り、結果的に園児・児童・生徒・学生にその教育的効果が還元されていくべきものであること。
- ③ 連携を単発的なものに終わらせることなく、各併設校・附属学校園の立場からそれぞれの活動を構造化し、カリキュラムのなかに体系化し、継続的な取り組みに育てていくことが大切である。
- ④ 連携は教育面に留まらず、研究面においても推進すべきである。

5. おわりに

はじめはどれだけの教職員が「総合学園ならではの教育活動」「教育学部と併設校・附属学校園との連携」に関心をもってくれるか、不安を抱えながらの出発であった本シンポジウムの企画であるが、補助椅子を必要とするほどのたくさんの参加者を迎え、特に附属幼稚園と小学校、学園本部から多くの参加をいただくことができた。さらにフロアディスカッションでは、時間の関係上、挙手いただいた方全員に発言の機会がまわらないほど、活発な議論が交わされ、盛会に幕を閉じることができた。ここから「総合学園ならではの教育活動」「教育学部と併設校・附属学校園との連携」に高い関心と期待が寄せられていることを実感することができた。

またパネラーの報告からは、中学校における数学の教育実習体験の取り組みや、附属小学校の総合的学習の時間に提供された「命の授業」、附属幼稚園のすぎのこ絵本図書館での絵本の読み聞かせのボランティアなど、園児・児童・生徒・学生に還元可能な互恵的活動の具体例も示されたことの意義は大きい。

フロアディスカッションでは、教育面での連携に留まらず、研究面での連携を視野にいった提案が多くなされた。大学と併設校・附属学校園の教員が共同研究し、その成果を教育学部の研究紀要にまとめ、実践記録と研究を蓄積していくことも重要である。

「一方向の協力から共同的な協働へ」をキーワードに、総合学園ならではの教育活動を一緒に作り上げる意識を共有できたことが本シンポジウムの最大の成果である。

今後の課題としては、このシンポジウムを単発のものに終わらせることなく、大学と併設校・附属学校園とが意見交換する機会を定期的に継続的にもつことが求められるであろう。